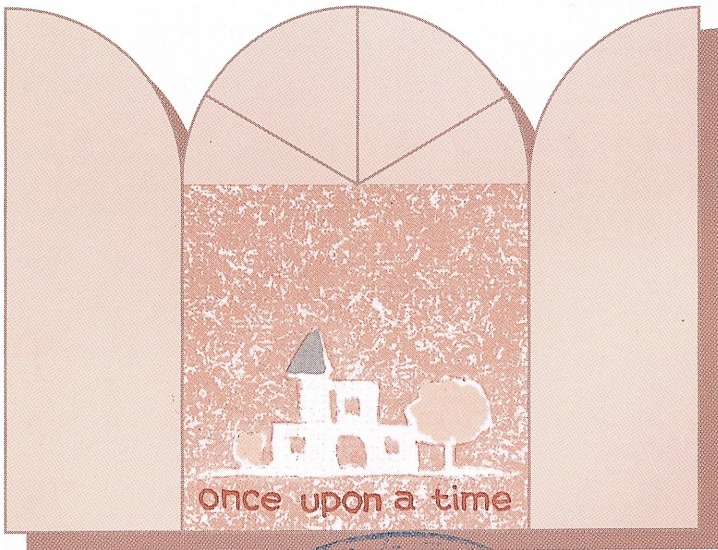


家庭—保育所—幼稚園

幼児の教育

'9910



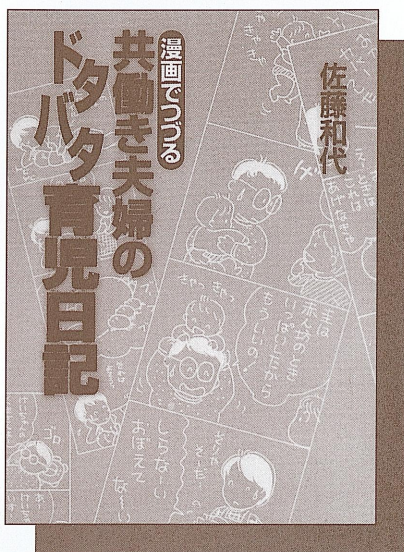
漫画でつづる

好評
発売中

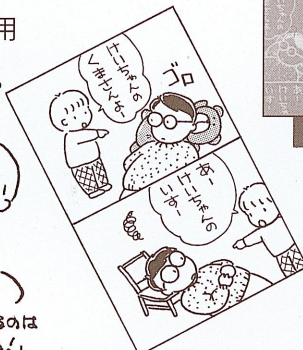
共働き夫婦の ドタバタ育児日記

個人的な育児にまつわるで
きごとが、子育て奮闘中
のお母さん方の笑いと共感を
よぶのびのび育児日記。

保育者にも、育児中の母親
がどんなことに喜び、不安
を感じるのかがわかり、母
親対応のコツがつかめる本
として活用
できます。



このごろよく言われるのは
「お姉ちゃんそっくりね!」



実家に行くとき、必ず柱
に傷をつけて背比べ。



湯どうろの上で
おどろカッソブ!

佐藤和代 著

B6変型判 208頁 定価：本体1,200円+税

キダーブックの
フレール館

幼児の教育

第98巻 第10号



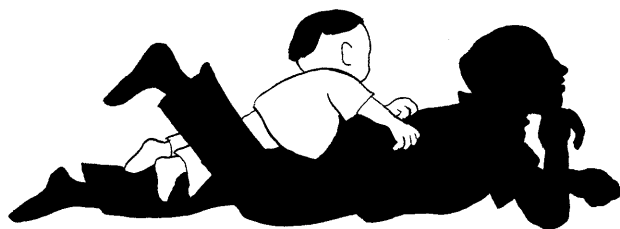
幼児の教育 目次

——第九十八卷 第十号——

© 1999
日本幼稚園協会

巻頭言

- 欠乏から渴望へ……………間藤 侑…(4)
- 保育現場からの現代幼児論(4) イノセンスの表明……………友定 啓子…(8)
- 実践と理論のあいだに(2) 公式理論と内潜理論……………田中 平八…(16)
- 教育対談の前後……………津守 真…(23)



特集へつなぐ・つながる

おたんじょうび おめでとう	永田 陽子	(28)
全国をつなぐ「黄柳野高校PTA」	森 清光	(32)
あたりまえ	河村 治夫	(37)
開発途上国での想いを帰国後も	前田美知子	(41)
編集者「つなぐ」雑記	伊集院郁夫	(46)
「つなぐ」「つながる」	加々美勝久	(51)

五人の仲間	吉岡 晶子	(56)
-------	-------	------

表紙絵／北村 俊道

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット／彌永たたえ「だっこ・おんぶ」

編集委員／田代 和美・吉岡 晶子・田中三保子

編集部／仲 明子



巻頭言

欠乏から渴望へ

美智子皇后 『橋をかける』 を読む

間藤 侑

私の手元に「猫を食わずにすんだ話」という一文のコピーがあります。筆者は現都知事の石原慎太郎氏、彼の大学同期の卒業四十周年記念文集に寄稿した、寮生活のエピソードが綴られています。私の親戚に石原氏の無二の親友がいて、時々こういうものが手に入ります。全く同時代に生きていた私自身の寮生活の青春を、ほとんどそっくり映しているように懐かしく読みました。その中に、彼が現代フランスの哲学者レイモン・サロンの言葉を引用しているところがあります。

「青春が青春たる不可欠の条件である貧困と欠乏（サロン）はまだまだ十分に寮生の青春を満たしてくれていたし、今思えば思うほど、欠乏の充足への願望は甘美であり、『貧困は至上の贅沢』でもあった」と書いています。寮近辺に出没する猛猫を遂に仕留めて「猫汁」にし、蛋白質の不足を補うというこの文のテーマになる話も、「貧困と欠乏こそ青春の不可欠の条件」という表現の線上にあるのですが、こうした当時の学生の精神生活の一面を象徴する言葉は、今の学生たちにはかなり解読困難かもしれません。

幼児教育とは全く無関係なこんな文章を思い出したのは、実は美智子皇后の『橋をかける』（すえもりブックス）を読んでいたときでした。この本はちょうど一年前、昨年九月のIBBY（国際児童図書評議会）世界大会インド大会に寄せた、美智子皇后のビデオによる英語の基調講演の完全収録版です。この講演の、平易な内容でありながら気品にみちた語り口と、現代という困難な時代への思いをこめたメッセージが、大きな感銘を多くの人々に与えた記憶はまだ新鮮ですが、「子ども時代の読書の思い出」という副題からもわかるように、ご自分の子ども時代の読書を中心に、三人の母となつてからの絵本や児童文学との出会いなどを、実に率直に語られたものでした。それは、どこのふうの家庭にもある親と子の「物語り」と、特に変わってもいないと感じま



す。

美智子皇后の少女時代もまた、先の石原氏や私の子ども時代と重なります。「教科書以外にほとんど読む本がなかったこの時代」とか、「この時期、私は本当に僅かしか本を持ちませんでした」などという言葉は、そのまま当時の子どものすべてに当てはまるものでもあったのです。読書の楽しみを知らなかったり、また本があってもそれを読みこなすだけの力がある程度無ければ、「本への激しい渴望」は生まれなかつただろうとも書かれています。が、「欠乏」感の生み出すエネルギーは、僅かに出会う何冊かの本からも、人生や自然へのさまざまな疑問や感受性をいかに多く手に入れることができるかを、具体的な経験から例示されていることに、深い共感を覚えました。

「どのような生にも悲しみはあり、一人一人の子供の涙には、それなりの重さがあります」「悲しみの多いこの世を子供が生き続けるためには、悲しみに耐える心が養われると共に、喜びを敏感に感じとる心、又、喜びに向かって伸びようとする心が養われることが大切だと思います。そして最後にもう一つ、本への感謝をこめてつけ加えます。読書は、人生の全てが、決して単純ではないことを教えてくれました。私たちは、複雑さに耐えて生きていかねばならないということ。人と人との関係においても、国と国との関係においても」という最後に記されたいくつかの言葉もまた、胸に重く響くものでしたが、それは、精神的にも成熟した今辿り着いたご心境では決してなく、すでに子ども時代の読書を

通して鋭く感じておられたことが、随所にうかがわれます。

そうした心の土台を、子ども時代のさまざまな体験の中に発見するとき、あらためて一般的な意味での、人格形成にかかわる子ども時代の大切さを思いました。また、美智子皇后の読書の記憶にうかがわれる感性は、詩人や芸術家などの幼少期のエピソードと共通するものを感じることもできましたが、やはりそれは、本への渴望が生み出す読書の喜び体験と無縁ではなかったと思います。

もちろん、本の世界はあくまで書かれたものにすぎませんから、そこにだけ閉じこもっているのではなく、「決して単純ではない」現実の豊かさと触れ合うことができませぬ。しかし、書かれたものが問い掛ける疑問や感動が、いかに現実をより深く広くとらえる知性や感受性を育むことかを、『橋をかける』は伝えてくれます。しかしあまりにも本が身近に溢れている今の時代、渴望が生み出す出会いや心の贅沢が、逆に難しくなっていくことを怖れます。一冊の本を与え、また読み聞かせることに、大人はもっと注意深くする必要があります。かもしれません。

(新潟青陵女子短期大学)



この暴力に対抗する存在としてまずあり、この与えられた様々の属性（このからだ、この性、この自分）を引き受けていく過程が、成熟すなわち大人になっていくことだというのである。それは、親に対するイノセンスの表明（対抗暴力）を通じて行われ、それが大人に受け入れられることによって解体していくという考え方である。

つまり、少々乱暴に言ってしまうえば、子どもとは自分の存在自体が不本意なのであって、それを「暴力」で周囲に投げ返していくことで大人になるということである。だから、非行は彼らの持つ根元的な対抗暴力性から見れば当然のことであり、成熟の契機でもあるという考え方である。



子どもは子どもではない

みごとに鮮やかな指摘で、そうかもしれないと私も思う。乳児がそこに存在するだけで、親は様々のことを突きつけられる。それがイノセンスの表明ということになる。私自身も幼児に触れていて、ずっと以前から、彼らの中に大人に対する密かな反逆精神を感じるものがあつた。たとえば、大人が困ることをわざと言う、大人の困惑や狼狽を楽しむ、あるいは、いきなりの攻撃を受けるなどの場面で、私はそれを感じていた。その時、子どもは子どもではないと感じていた。大人の考えている子ども概念をうち破って対抗してくるのだととらえていた。子どもは大人への対抗暴力だという指摘は、そこにぴったりと重なってしまふ。

ただしこれは単純な敵対関係ではなく、この対抗暴力を大人が肯定的に受け止めて

いくことによつてのみ、子どもは成熟できると岸沢氏は考える。逆にこれを十分に受け止めないで、子どもに否定的抑圧的に対抗すると、大人は権力的存在になつていく。そこにはいくつかのバリエーションがあるが、それをイノセンスの収奪と言つてゐる。

親の自己規定

問題は、このように規定することによつて、大人の側にどのような視座が獲得されるのか、それによつて子どもとの関係がどのように変わつていくのかということである。

おそらく大部分の親は自分自身の根元的暴力性を自覚はしてないだろう。むしろ、子どものために自分をも投げ出す善意の存在として自覚しているだろう。そういうところに、子どもとは親に対する対抗暴力だと言われても、親はそう簡単に受け入れられないとも考えられる。

しかし一方で、子どもの反逆的な行動を前にしてた

じろぐ親の非力さを思い起こせば、この指摘はそう突飛なものとは思えない。親子関係が権力関係だという指摘は、大昔からあつた。エディプスコンプレックスもそうだし、心理臨床の中で精神的な「親殺し」が子どもの自立のための主要なテーマになつてゐることももうなすける。アダルトチルドレン問題もそうだ。

もしかしたら、率直に親は子どもに対して権力なのだという認め方をしなくなつてきたことが問題なのではないか。子どもを子どもという枠の中に押し込め、過大な役割を課し、それに対し「子どものため」という狡猾な正当化を行い、しかもそれに気づかない根深い自己欺瞞性こそ、問題なのではないか。自らの暴力性を認めず、子どもがまっとうな対抗暴力を行使することを認めないところに、悲劇があるのではないか。

家族の矮小化と親役割の肥大化

子どもが第一義的に「被教育的存在」と化したのは、近代の所産ともいえる。一つの家に生まれ、運命

共同体の一員として、ともに生きていくはずの存在であつたはずの子どもたちが、共に生きる存在である前に「親によって教育される存在」になつてしまつた。あるいは、親個人の教育力を証明する存在になつてしまつた。地域が教育の場であることをやめて、個々の家族がそれを担うことを求められた。家族の主要な機能は「教育機能」とされ、親役割が異常に強調され、家族の成功は子どもでか如何にかかっているとでもいえるような家族機能の矮小化がそこにある。

権力の分断線

今や、子どもたちは生まれ落ちたその瞬間から、親の期待を一身に浴び、まさに「被贈与性」の固まりとして、家族の前に存在する。さらにその根元的「被贈与性」に加えて、自分が受け入れられることにもさらに条件を付けられ、芹沢氏の言う「権力の分断線」を設定される。これは親がその子を受容するときに、子どもに条件を付けることをいう。その条件の範囲内な

ら受け入れ、外側の場合は受け入れないという一方的に親の側から引かれた境界線のことである。それはいつてみれば、後天的な「被贈与性」とでもいえるものである。そして現代の発達環境の破壊もそこに含めて考えることもできる。

子どもはその境界線を敏感に感じ取つて、親に受け入れられるために、その内側に入ろうとし、自分自身とその条件を課す。幼児の自然なありようを無視した、とてつもない親の期待が一方的にかけられるのである。それに応えようとけなげにがんばる子どもたちが、根元的怒りを他者に振り向けるのも無理はないと思えてくる。

「子どもらしくない」子ども

そんなことを考えずにいられない一人の男の子N男を紹介する。彼は五歳児で、保育者によって「子どもらしくない」ととらえられた。保育者によって書かれた記録と考察の中から、抜粋させていただく。⁽²⁾

* 誕生会の世話係のグループを決めることになった。N男はどこにも入れず、もう一人残ったY男と一緒にになる話が出た。そうこうしているうちにY男が、N男の頬にキスをする。N男は「つばをかけられた」と大泣きを始める。落ち着くのを待つてN男の話を聞くと「Y君がつばをかけたんだ、僕はね、今までずーつと我慢してきたんだ、なんべん言ってもY君はね、つばをかけたたたこうとしたりするんだ」保育者「そうか、N君は今までずーつと我慢してきたんだ」「前もね、D君や他の五人からもたたかれたりしてきたけど、それでも我慢してきたんだ」など、泣きながら話す。(四月。実はこのD君云々は二年も前のことであった)

* N男、片づけの時、「裏の方にたくさん自転車が転がっていたので、ぼくが片づけてきた」と言う。保育者「そうかい、たくさん出しっぱなしにしてあった

んでそれを片づけてくれたんだね、ありがとう」と言う。あと、四歳児のクラスが弁当を食べているところに行つて、「なあー、君たち、お兄さんがいるからいいけど、僕たちがいなくなったら、君たちがやらなくちゃいけない。お兄さん達は小学校に行くんだからなあ、今はまだいいけどな、わかったか」と言う。

* N男は、ゴールキーパーに自信を持っている。「僕はね、いつもキャプテン翼を見てるんだ。だからサッカーが上手なんだ。教生先生のボールも一回しか入れられたことがない。あとのボールは全部止めたんだよ。先生のボールも全部止めたよね」。(五月)

* かたづけの時間に入ったのに、まだ遊びを切り上げきれないでいる実習生の所に行き、「やめる！片づけろ！」とほうきを振り回してどなりながら言い続け、止めさせようとする。

保育者が「教生先生も痛いし、それにどんなにがん

ばって叩いたり蹴ったりしても勝てないと思うよ」と言うのと、N男はよく「そんなことはないよ、だってね、僕はお父さんに何回も勝っているんだよ、いつもお父さんと戦いごっこして僕が勝つんだ」と話し、力を込めた拳を見せた。

*水着を持っていなくてプールに入れなかったときに保育者が家も近いので「おかあさんに持ってきてもらえば？」と提案すると「おかあさんはね、すぐに忘れるんだ」「おかあさんがすぐ忘れるからダメなんだ」と繰り返す。(七月)

一学期の特徴として、*友達の良い行為に対し我慢強く対応するが、我慢しきれなくなると激しい感情表現を



する。*大人びたものの言い方をする。思いのままに行動することが少ない。心にブレイキをかけながら行動する。我慢することが多い。*大人(特に実習生)に対して攻撃的な行動をとることがある。*年少児、年中児に対して自分は年上であり、何でもわかっていなのだという態度をとる、と保育者は指摘している。

N男の考え方には枠があり、周囲の子どもや大人がそのパターンにおさまっていないときは歯を食いしばったりしてひどく苛立つ。「やめろ!○○するんじゃない!」「○○するときはじやろうが!」とひどく言う。実習生に対してはくっつくかかかることが多かった。担任に対しては、「○○したらいいよね」「こをもっとこうすればうまくできるよね」などと思見(?)を言うことが多かった。「僕が○○できるのはね、よくうちで練習してるんだよ。修行してるんだよ」と言う。

よく我慢をする。「俺は○○ができるん

だぞ」と自分がいかにすごいのかを話す。なんでも自分が一番だという気持ち強い。友達と競うことに異常に反応する。「先生、かけっこでは子どもの頃何番だった？僕は風組の時一番だった」と順位が気になる。そしてそれが認められると安定する。

ロボットになる

二学期になると、ロボットになることが多く見られ、一方でサッカーでS男に負けないことが、生活全体に影響を及ぼしていた。

*午前中、牛乳パックを腕と足にはめ、段ボールで作った盾をもち、ペットボトルを逆さにもって、棍棒にし、「戦い」と言つてそこいらじゅうをねり歩いている。保育者「だれと遊んでいるの？」「いや、別に」「戦いごっこの相手はいないの？」「いや、戦いごっこじゃないんだ」「なるほど、じゃ、そうやってN君の姿をみんなに見せているの？」「そうでもないんだだけ

ど」とはいうものの、F男を相手に戦いを挑んでいる。F男は全く戦う気がない。

*「僕、ロボットになる」と言つて、牛乳パックとティッシュの箱を足にはく。ヘルメットをかぶると言い、廃材の箱をもつてきて一生懸命に作り始める。

*最近私（保育者）をよくくすぐる。「先生の弱点だ」と言つて脇の下をくすぐる。「先生には弱点はないのだ」と言つても何度もくすぐろうとする。私もN男のからだをくすぐり返すが、平気な顔をしている。

（九月）

S男をライバル視し、どうしても勝てないと感じ、不安定な日が続いた。こういうN男に対し、保育者は、様々な働きかけを行い、N男を理解しようとする。一年の間の成長の姿を認めることができた。N男の「子どもらしくない」言動の裏には、「自分のしたいことを満足するまでしたい、友達と仲良く遊びたい」という強い気持ちがあったように思えてならない。そ

の気持ちを隠すように目立った言動をしていたのではないかと思う」。このこと自体がN男の「子どもらしい」表現だったということに気づいたと保育者はまとめておられた。

N男は周囲の子にとっても強い態度で望んでいたし、自分は能力があると本人も信じていたようだったが、その実とても不安定で、絶えずそれを自分と他者との関係で確認していなくてはならなかった。そのためには、少しでも自分の価値を下げてはならないと緊張し、率直な感情を表に出せず、ときには異常なまでに攻撃的であった。彼が不安定なときは、「ロボット」になるというのも、象徴的だ。強く誰にも負けないけれど、外からは表情が見えない、自分の本心はその中に隠れてしまう。他者に心を開くこと自体に警戒心を抱いているのだろうか。

次に感じるのは、大人全体に対する対抗心である。なんだか「対抗暴力」の固まりみたいな感じさえずる。父親に対しても異常なほどの対抗心を抱いている

し、母親にも信頼感を抱いていない。そして、担任の先生にも「弱点」を見つけ、攻撃する。決して笑わない。そして実習生には、くっつかかる。親や大人は、彼にとっては自分を支え受け止めてくれる存在ではなく、自分の強さを証明するための存在でしかなかったようだ。勝たねばという思いにひきずられ、強い自分でなければ存在する価値がないと信じている。親の引く分断線がどんなに子どもを追いつめるか、その残酷さが見えるような気がする。

(山口大学)

(1) 芹沢俊介『子どもたちはなぜ暴力に走るか』岩波書店、一

九九八年

(2) 野村泰「大人のような言動が多いと思ったN男(五歳児)

山口大学教育学部附属幼稚園研究紀要第二〇巻、一九九

四年

実践と理論のあいだに(2)

公式理論と内潜理論

田中 平八

今回は、「内潜理論」構想を説明することに終始してしまつたようです。ここであらためて「公式理論」についての議論に移ります。内潜理論の曖昧さにくらべれば、「公式理論」のほうは、誰にも理解できるきちんとした形態を整えているようにみえるかもしれません。でも、この一見疑うべきようもないかたちで目

の前にあらわれてくることが、実はいちばんの問題なのだという話からはじめようと思います。

長らく保育学会の会長をされていた山下俊郎先生という方がおられました。この保育界の重鎮が著された『幼児心理学』・『児童心理学』などは、かつて幼稚園や保育園を訪れると、園長室の書棚に必ずといって

いほど並んでいたものでした（若い読者にだけ必要なコメントですが）。その山下先生の学位論文は「用箸運動における成熟と練習」といった内容であったよううかがっています。研究論文としては読んだことがあります。研究論文として読んだことですが、ゲゼル学派を標榜されておられた先生ですから、年齢分布から直接にその発達傾向を把握しようというものでした。

ゲゼルは、発達研究における「氏か育ちか」論争の成熟説（つまり氏側）の代表格のような学者でした。心理学の教科書に、黒い赤ちゃん（？）のシルエットが載っていたのをおぼえておいでの方も多いでしょう。「一方の子はせつせと階段登りの練習をくり返しました。もう一方の子は何もしませんでした。でも、時が満ちるとどちらの子も難なくのぼれるようになります。めでたし、めでたし」といったような解説がついていました。

ずいぶん前に私も簡単な調査を何度かしたことがあ

りますが、いま昼時の学生食堂に行ってみればデータも必要ないことがひとめで了解できるでしょう（ほんとうは異動したので資料がみつからない）。筆記用具の持ち方も基本は箸と同じですから、こちない人が少なくありません（一緒に行方不明）。山下先生は六、七歳までで調査をうち切っていますが、私が調べた当時すでに大学生の半分は正しく（山下先生の類型でいう最高位の七型で）箸を使えない事態となっていました。だから、成熟の結果として用箸運動は完成しないというのが現在の結論となるでしょう。しかし、大学生の味方をする、パスタ類であればフォークとスプーンを使って実にスマートに食べます。立てた人差し指の周りをシャー



ペンくるりと回す軽業だって相当数の受験生がやれます。

先に釈明をいたしますが、山下先生を批判するのが趣旨ではありません。私は山下先生たちが造り上げられた自由闊達な雰囲気の研究室で育てられたひとり、いわば祖父の話ならさしさわりも少なからう、許してくださいさるだろうと甘えて、事例に使わせてもらっているのです。

仮にゲゼルにしたがつた解釈を試みてみますと、用箸運動というものは、階段登りのように単に成熟要因だけでは到達しえない複合的なスキルであって、それを発達指標に選んでしまったということかもしれない。理論闘争華やかなりし当時だったら、「育ち派」つまり学習理論にたつ人たちは、わが意を得たりというところでしょう。イデオロギー対立が過去のものになった現在の主流からすると、文化という枠組みを全面に押し出してくるかもしれません。家族シス

テムという側面から変化を解くのも現代流でしょうか。また、古典的にピアジェの用語を使ったら、さらにヴィゴツキーだったらどう考えるか仮想してみたら大学院入試の練習として有益かもしれません。いずれにしろ、ここでは公式理論の中味を問うのが目的ではありません。強調したかったのは、権威ある「公式理論」ですら時代とともに変遷することがありうるという例でした。

次の設問に移りましょう。ごく一般の人たちはいったいどうやって公式理論に触れるのでしょうか。 magari なりにも私たちは研究者、教師が職業ですから、とさおり少しだけ何らかの公式理論を改築する論文を書いて研究者のアイデンティティを維持して、各種公式理論とその根拠となるエピソードを自らの手柄のように学生に分け与えることをなりわいとしております。まことに胡散臭い稼業で、その楽屋裏を知る機会も多いですから、そう深刻になることはありません。しか

し、一般の人たちは、公式理論が産出される現場から、そのニュアンスも含めてじかに情報を手に入れる機会はめったにないでしょう。実のところ、何かさし迫ったことながらを解決しようとしているときに公式理論に接するのは、「専門家」を介してであるばあいが非常に多いのではないのでしょうか。専門家の存在は、とくに実践の場面において重大な意味をもっているはずなのですが、これまであまり議論されてこなかったように思えるのです。

なにげなく聴いていたNHKラジオ三時の相談番組でいまだ記憶から押しやられない内容があります。それは母親からの相談で、高校生の娘は私^が何か言う^と怒り狂って手^がつけられなくなる、娘の最近の性^にかわる行動には納得がいけないけれど、言えばまた荒れるのがわかるので何も言えない、という相談でした。回答者の質問に誘導されて、かつて家出があったり不登校があったとき、相談所の担当者^に「まわた

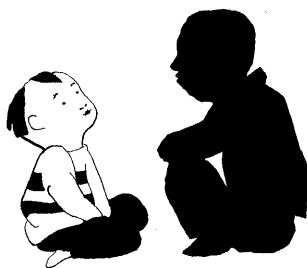
くるむように接しなさい」と言われ、両親ともそれをずっと守ってきたのです、ということでした。本当にカウンセラーがその通りに言ったかどうかはわかりませんが、とにかく「まわたでくるむ」を金科玉条として、親の本音、不安を口に出したいこともあつたらうに我慢しながら、腫れ物にさわるように過^こしてきたのが手に取るようによくわかります。そのほうが娘さんが穏やかで過^こしてくれるという逃げの姿勢も少しはあつたでしょう。そうしたやりとりを聞きながら……、身体の周囲にちようど緑日のわたあめ製造器の中のように「まわた」が漂^たっていて、それを押しつけて両親の近くに行こうと一生懸命もがいてもたどりつくことはできないし、親の表情も白く薄いまわたの向こうにほんやりとしかとらえることができない、そういう可哀想な女の子のイメージがフロントガラスの向こうに浮かんできて、不覚にも風景が滲^しんできてしまいました。

家庭内暴力がエスカレートした子どもを金属バットで殴り殺した父親の事件が最近ありました。一九七八年にあった開成高校生殺人事件を彷彿とさせる、その教訓がまったくいかされていらない、やりきれない事件でした。メディアの伝えるところ、相談した精神科医だかに、できうる限り手向かわず命令されたことを聞いてやるようにと示唆されたそうで、愚直なほどにそのことを守りつづけたあげくの行為でした。このばあいも、親と子がはだかで直面し合う機会をとうとう逸したまま深刻な事態を迎えてしまったわけです。ラジオ相談のケースと同じように、実際に専門家がどう言ったかではなくて、専門家のことばを公式理論として受け取って自らの行動を縛り、それを遵守することを自己目的化してしまうことが、いちばんおそろしいことだと思えます。

私もひとのことばかり言えないので、わが家に初めて子犬が到着したとき、すぐに遊びたい心を抑え（息

子にも強要し）、天井だけが開いている段ボール箱の中で、指示された通りの期間を過ぎさせました。専門家の言いつけに愚直に従ったのです。わが家の犬は飼い主の行状を顧みるとおおむね立派

なものだと思うのですが、どうしても改善しない困った行動もあります。屋外の音に選択的に反応して吠え立てるのもそのひとつです。最近のテレビ情報番組を見た妻によると、子犬のとき「箱入り娘」にしたのがいけなかったと言います。外が見えないから音だけに敏感にならざるをえなかったということでしょうか。そう言われれば半分折れていた片耳は、しゃきっと立った成犬になってしまいました。テレビの側も犬の



専門家とはいえ、問題行動の遠因が初期の隔離に遡るというのは納得せざるを得ません。私は動物好きの心理屋で、その手の知識はいっぱいあったはずなのに、専門家、といったってペットショップの店員、のひとことで思考停止となつてしまつたわけです。人間を相手にしてもこんなことをたくさんやっているのかなか。専門家という縛りがいかに強力かという例示でした。

公式理論は、専門家、専門書（育児書が要注意のようです）などはつきりした対象から取り入れるばかりではないようです。「三つ子の魂百までも」ということわざがあります。私は放送大学の面接授業に長らく参加してきました。さまざまの年齢層の受講者がいますが、いつからか、このことわざについて質問してみることになっています。ほとんどの人が心理学的に考えて正しいと認識しているのです。しかし、その出所と根拠についてたずねるとみなさん途方にくれたような

表情をします。これも多くのひとの行動を規制している公式理論のひとつでしょう。血液型と性格の関連などは、獲得経路が定かではない取り込みのさいたるものと言えると思います。

最後に、こうした設問はいかがでしょうか。ベビーベッドであなたの赤ちゃんが泣いています。泣いているからといってそのたびにすぐ駆けつけてあやしたりしている、いわゆる「抱き癖」がついてしまします。これをよく説明する心理学理論は、学習における条件づけのメカニズムです。赤ちゃんは、しだいに泣けばかまってくれるという関係を学んでしまうというわけです。一方、赤ちゃんが泣くには泣くだけの理由があるだろうという見方もあります。泣くたびにそばによつてあやしてあげれば、安定した細やかな情動をもつ人間に育つはずだとみなすのです。このばあい、準拠する心理学論は、愛着の発達に関するメカニズムです。さて、どちらが正しいでしょう。この話は、昔

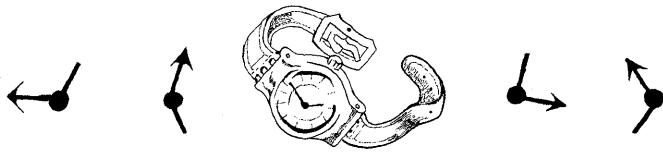
読んだ発達心理学の翻訳書の冒頭の部分にあったような気がしているのですが、今回どうしても見つけられませんでした。その答えは、赤ちゃんによるというもので、このころから赤ちゃんの生れながらの特質、氣質の存在を議論し始めたのだと推測されます。現代の発達心理学では、母親への愛着の質を、A、B、Cタイプに分類することがあつてですが（今はDタイプもあるのではか）、そういった話題へとつながっていく初期のころの記述だったのでしょう。

問題は、設問に対する二者択一のその先にあります。私たちはついぶん前、都内の区立保育園へ毎年定期的に通う作業をしておりまして。子どもたちの周辺は今ほどかまびすしくありませんでしたが、表面にはあらわれないだけで保育さんたちとついぶん憤慨していたものです。帰宅して子どもがまとわりついてうるさいので座らないという母親、ダイエットしている子どもにも食事を作らない母親など、今でも心がざ

わつきます。

そのときに得た実感なのですが、抱き癖がつくと持論を展開するお母さんは、そんなに放っておかずにもうちよつと赤ちゃんのそばに行つてかまってあげてほしいなと思う人、愛着派のお母さんは、そう神経質にならずにもう少しゆとりをもって赤ちゃんから離れられないかなと思う人。当時から、こんなふうに秩序だつて考えていたわけではありませんが、子どもたちのためにも相互に入れ替わつてほしいと、いつも無力感をおぼえて帰途についたものでした。人間は、自らの潜在理論に整合した公式理論を半意識的に選択してしまう傾向があるのでしょうか。

（秋田県立大学）



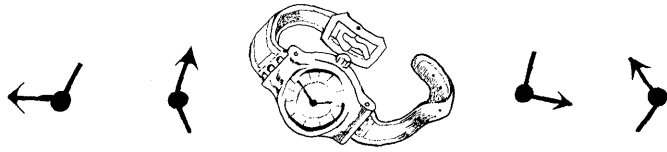
教育対談の前後

津守 真

ダニエル・ウオルシュとの出会い

半世紀にわたって、私がかかわってきた幼児たちが、大人になるのをみてきて、私は幼児期の大切さをますます痛感している。

今回、青山学院大学で行われた日本保育学会で教育対談をした米国の心理学者、ダニエル・ウオルシュと私を知り合ったのは、そんなことを考えているときだった。彼は、私の保育学の歩みに興味をもち、昨秋、私の兵庫教育大学付属幼稚園での講演前

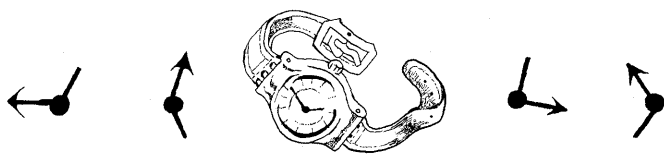


夜、ゲストハウスを訪ねてこられた。話すうちに、彼は心理学者であるけれども、幼児の生活を真剣に考えていることがじきに分かった。彼は、息子を通して半日を日本の幼稚園を高く評価していた。その後、東京で愛育養護学校にも来られて半日を過ごされたが、その謙虚で丁寧な観察に私は印象づけられた。丁度たまたま、森上史朗先生から日本保育学会での講演のご依頼をうけた私は、ウオルシユと対談したら話に広がりができるのではないかと考え、それは現実の運びとなった。

Eメールの交換

ウオルシユは間もなく米国の大学の大学に帰ったので、コンピューターのEメールを使って対談の準備をすることにした。昨年十二月からはじめて、ほぼ二週間ごとに交信し、かなりの長文にわたることもしばしばだった。私には初めての経験だったが、郵便局に出しにゆく必要もなく、両方に自動的にコピーが残るという現代技術の利点があった。

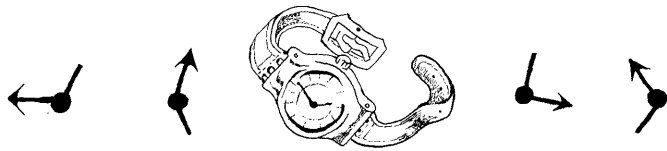
外国人との対談には、言語の問題がある。私共は、半年にわたって交換した意見のどの部分をどういう順序で提示するかについて、これもメールで打ち合わせをしてあった。それにしても、その場でのやりとりには価値がある対談での言語を考えると、頭がこんがらかってしまう。結局、用意した原稿はわきにおいて、互いにその場で臨



機応変に話すことにした。メールを通して相互の考えを理解し合っていたことがそれを可能にしたし、兵庫教育大学の鈴木正敏さんというウオルシュと親しい通訳者の助けも大きかった。メールの一部の翻訳を配布資料にし、参加した外国人のために英文資料も用意したことも私共の安心感となった。

保育の真価——日本からの発信

メールの往復のなかで、米国の幼稚園と日本の幼稚園との相違がしばしば話題になった。日本では、保育室と園庭との間を子どもは自由に出入りできる、園庭には子どもの冒険心に答える遊具がある、水を流して遊ぶ砂場がある、裏庭には大人から監視されることのない遊び場がある。それらは現代の米国では失われたものだとウオルシュは語った。半世紀前に私が米国に留学していたときには、米国の幼稚園では進歩主義教育が主流だったことを語ると、彼はそのとき自分は六歳だったと笑った。米国の幼児教育はこの間にどうしてそんなに変化してしまったのか。社会の多くの面で、米国で起こったことは十年、二十年後に日本でも起こるのが常であるとするならば、これは日本の幼稚園の未来図でもあるのか。そうだとすれば、現代、幼児教育は世界的な規模で危機にある。ウオルシュは、「日本は米国に学ぶものがいくつもあるだろうが、幼児教育についてはそうではない」と、語を強めて言った。日本の保育者は、



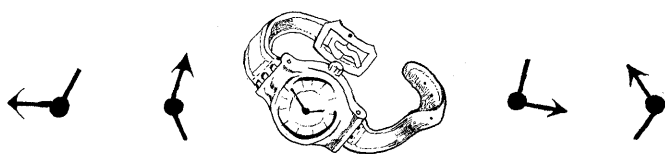
人間を育てる保育を世界に発信する時ではないか。「育てる心」こそが、現代に必要な「徳」であり、それを養うことがあらゆる段階での教育ではないか。

保育研究は子どもを生きやすくするために

メールの交換に当たって、ウオルシュの著書「文脈の中での子どもの研究―理論、方法、倫理」(M.Elizabeth Graue & Daniel J.Walsh, SAGE Publications, 1998) が郵送されてきた。私は『人間現象としての保育研究』(津守 真、本田和子編 増補版一九九八年 光生館)を一九七四年に出版して以来、米国の科学的心理学から意識して遠ざかっていたが、この書物を読んで、私がこの二十数年来やってきたのと同じ方向で考えている若い研究者が米国にもいることを知って心強く感じた。ウオルシュの著書の一部を私は本誌七月号に図書紹介として記した。「保育研究は、この世界を子どもにとって住みよい場所にするためのものである」。これは私共に共通の保育研究の前提である。

大人は子どもから生き方を学ぶ

保育学会を終えて後、ウオルシュは、再度、愛育養護学校を訪問し、母親との懇談会に参加された。ここは障害をもつ子どもの学校であるが、私共は障害に対する特別



の教育をしているのではなく、人間が生きやすくなるための保育をしている。このことをめぐって、ウォルシュは親たちにいろいろと質問し、親たちもこの保育の考えをたいせつに思っていることを、具体的に話した。そのひとつに、発作の話があった。発作も個人の身体の出来事であるだけでなく、生活全体のことである。子ども自身が自分の身体の変調に気づいてそれに備え、他の人もそれを日常のこととして、皆が過ごしやすくすればよい。そういう保育環境で生活していると、子どもは発作が始まる前に、「なんだか、へん」と言っ、大人に知らせ、自分からソファに横になる。この日も、その子は、他の子どもが発作を起こしそうになったのを見て、「この子、へん」と言っ、先生に知らせたのだった。自分らしく生きる日常生活の中で、子どもは全体状況を視野に入れて、自分の行動を自分できめる。そのとき発作も身体の変態だけではなく自分が生きる条件のひとつになる。

白状すると、教育対談の前日、私は不覚にも身体不調になり、倒れてしまった。当日の教育対談は多くの方々のお世話になりながら無事に終えることができたのは幸いだった。子どもたちは発作を起こしそうになると、自分で備えるのに、私はそれをできていない。子どもから生き方をしっかりと学びなおさなければいけませんねと私は皆から言われることになった。私もそう思う。

特集 へつなぐ・つながるく

おたんじょうび おめでとう

永田 陽子

ファックス出そうよ

「今日、R君来るかな?」「またお休み?」「R君
どうしているのかな?」五歳児十二月の朝。十一
月から母の病気で田舎へ行ってしまったR君を気

にしている様子が部屋のあちこちから伝わってき
ます。「R君が来たらこれあげるんだ」と、絵を
描いたり空き箱でR君の大好きな車などを作った
りしている子もいます。もうすぐR君の誕生日の
日です。「みんなで作ったカード送ろうか?」と

提案すると、子どもたちは、「カードはみんなの前でもらいたいよね」「そうそう、どきどきしてうれしんだよね」「カードを送っちゃうと、もしR君が誕生日に来たらあげられないから、送らないほうがいいよ」という意見も出ました。そこで、みんながR君が来ることを祈って、誕生日の日を迎えることにしました。

でも、その日、R君は来ませんでした。子どもたちのがっかりした気持ちが伝わってきました。せめて、「おたんじょうびおめでとう」と言いたいみんなの気持ちだけでも伝えたいと思い、「どうしようか？電話しようか？」と投げかけてみました。「先生、ファックスにしたら？みんなでお手紙書いて送るの」というE子の提案に、「ファックスって何？」と言う子もいましたが、「そうしよう」ということになりました。子どもたちは園長先生に許可をもらいにいったり、紙を

用意したりして寄せ書きが始まりました。私も参加しようと覗いてみると、そこには絵が描いてあったり、「すもうのえじょうずだね。いつもすごいとおもっていたよ。こんどおしえてね」、「おめでどう。はやくあいたいな」、「いつも、なにしているの？」など、みんなの気持ちで二枚の紙が一杯になりました。殆ど一緒に遊んでいなかった子どもたちの心のこもったメッセージにも驚きました。みんながファックスを出しに行きました。初めてファックスを見て、紙がまた出てきたので届かないのではな
いかと不安に思っ
た子もいました。

R君も元氣

なんだ

お弁当を食べて



いると、園長先生がにこにこしながら「R君からお返事きたわよ」と、ファックスを届けてくださいました。みんなで大喜びでそれを見ました。おばあちゃんと一緒に作ったという、六ぼんのろうそくが立っている大きなケーキの前にR君が笑って立っている絵と、弟と縄跳びをしている絵でした。「みんなの気持ちとR君の気持ちがつながっているんだ！」ということを実感した瞬間でした。それからは、「R君、どうしているかな？」の声は聞かれなくなりました。その絵を壁に貼っておいたら、子どもたちが時々その絵の前に立ってじっと見ていました。私にはその絵を見ながらR君の姿を心に描いているように見えました。前にクラスで歌っていた『あいたいひとにあいたいときはーよんでみようよーそのなまえー…かえってくるよーあのほほえみがー』という『ホ・ホ・ホ』の歌が自然とはやりました。歌を口ずさむこ

とで安心したようです。一ヶ月後、R君が登園しました。うれしさのあまり走り寄り抱きついた子もいました。私もR君の少し照れたような顔を見てほっとしました。

一緒にいなくても一緒だね

『つながる』とは、いつも一緒にいることではなく、たとえ一緒にいなくても心の中にその人の存在が描けることだろうと思います。R君の幼稚園に行きたいけど行けない思いや、みんなに会いたいけれども会えない思い、そして、みんなのR君を気にかける思いや会えない寂しさなど、いろいろな思いは、そのまま、お互いのつながりの中で生まれていました。R君と過ごした幼稚園での二年間、あるいは三年間に、生活を共にしながら、みんなと一緒にいることで感じる嬉しさ・楽しさ・悲しさ・つらさ・くやしきなどたくさん

思いを共にしたことが根底にあるようです。

ファックスでのやりとりは、そうした「つながり」を具体化することになりました。ファックスというもので「つなぐ」ことで、心の「つながり」が目に見える形となり、子どもたちも自分たちの心の中にある友だちへの思いを意識化し、自覚し、ますます強めていった気がします。保育者の意図だけで子どもたちの気持ちを「つなぐ」ことはできませんが、子どもたち自身に「つながり」を気づかせ、はっきりと自覚させることで、より確かな子どもたちのパートナーシップが構築されるようにかかわることはできるように思います。

共にいる

四月。三歳の新人園児と過ごしながら、一人ひとりばらばらな子どもたちが、これからどのような

なプロセスを辿って、人と「つながっていく」という体験をしていくのだろうと考えさせられている毎日です。初めて気の合う友だちと出会い、意気投合しうれしさのあまり、奇声を発しながら走り回り、翌日も一緒に遊ぼうとすると、今度は「あっち、行って！」と拒否され、悲しい思いをしたりと、いろいろな体験をしている子どもたちです。しかし、「つなぐ」ことを急がず、こういう気持ちの積み重ねを通して、幼稚園生活の中で「つながった」という実感を十分に味わって欲しいし、私自身も味わいたいと思います。人が人として、周囲の人と共に存在しあっていることの実感を大切にしていきたいと考えています。

(日本女子大学附属豊明幼稚園)

全国をつなぐ

「黄柳野^{つげの}高校PTA」

森 清光

理想の学校を追い求める「黄柳野高校」とは

愛知県の奥三河、鳳来町。大自然に包まれるように「かけがえない人間として、多様な可能性と能力を秘めている若者達が自らを豊かに表現し、創造力を発達させ、自立と社会への貢献観を

もった民主的な人格を育む学校」「内中点や偏差値など数字のみでは計り知れない多様な能力と可能性を秘めながら、高校を中途退学してしまつた。小・中学校は休みがちであった。でも、もう一度やりなおしたい」「学校の理念に賛同し黄柳野高校でやりたい」そんな若者達が全国から集う

全寮制、二四時間体制の学校である。

今から約十年前、学校創りが提唱された。特定のスポンサーを持たず、全国数十万人の賛同者の寄付により、幾多の困難を排して一九九五年四月、世界でも始めての「市民立」学校法人・黄柳野学園「黄柳野高等学校」は誕生した。

全国に拡がる黄柳野PTA

黄柳野高校には、全国から生徒が集まっている（九九年五月現在、北は青森県から南は鹿児島県まで三七都府県）。そんな理由から、学校に一同に集まるPTA活動は制約されてくる。そこで、全国を五つの支部に分け、支部の中にブロックを作り、普段の活動を行っている。

おおまかなPTAの方針を掲げると、①より多くの会員が活動に参加する ②保護者の積極的な学校行事への参加 ③公費助成運動をすすめる

④黄柳野高校発展のために協力する ⑤学校を支える力を蓄える、以上五点に絞られよう。つまり子どもを中心に積極的に学校行事を支え、誕生して間もない学校を物心共にサポートできる体制を全国的に組織する活動である。

夜を徹しての交流会

全校的にPTAが学校に集まる行事が昨年の場合五回ほど設定された。PTA総会・オールナイトウォーキング（豊橋から学校まで約三八キロメートルを子ども達が夜間歩行する）の手伝い・超リフレ（寮、学校の補修清掃）二回・学園祭（PTAは全国の物産展などを行い、地元の方にも大変喜んで頂いている）・卒業式、である。遠路に関わらずたくさんの保護者が参加する。この機会を利用してスタッフ（黄柳野では生徒を含め教師を先生と呼ばずスタッフと呼び、教師と生徒

の上下関係を排している)との交流会を開催した。子どものこと、学校のこと、教育のこと、人生観のことなど話題は様々だがいつも明け方まで続く。地方、地方で考え方に特色が有り、いつも「黄柳野の親語録」を作ろうと思うのだが若干飲み物が入るので翌朝には忘れてしまうのが残念である。

鳥の鳴かぬ日はあつても

PTA活動のない日はない

手元に昨年度の行事一覧表がある。PTAが関わった行事が、なんと百七十七日ある。その多くが各地で開催される支部会、ブロック会、学校報告・説明会である。これは実際に開催された日数なので計画段階から入れた延べ日数は優に三六五日を超えるものと思われる。

支部会・ブロック会は、遠くてもいつも何らか

の形で学校に関わることで、スタッフを招いて、学校の情報を伝え意見交換することを主目的とするが、各支部で趣向をこらした「親が楽しめる行事」も活発である。

学校報告・説明会は、子どもを黄柳野に入れた人、黄柳野の教育に興味を持っている人、支援して頂いている人、教育関係者などが集まり、黄柳野の現状、黄柳野の理念等を多くの方知ってもらうために全国で開催されている。できるだけ黄柳野の生徒も同席し、自分たちの生活、黄柳野に行つて思ったことなどを語り出席者の共感を呼んでいる。黄柳野高校の役割を知らせる仕事はPTAの大きな仕事の一つである。

「おらが学校創り」としてのPTA

少子化のあおりで、現在多くの高校の生徒募集は容易でないのが現状である。定員割れをしてい

る学校も少なくない。学納金、生徒人数割りの助成金に頼る私学の経営にとって定員割れは死活問題である。黄柳野の場合も例外ではなく前述のとおり全国で黄柳野を紹介するとともに助成金増額の運動に力を注いでいる。愛知は全国一私学助成の多い県ではあるが昨今の情勢から教育予算の減額が懸念されている。他の私学の保護者とも連動し運動を盛り上げるのもPTAの役割である。

黄柳野高校の出発は資金的に裕福なものではなかった。「何とか出発できた」のが実状であろう。設備不足の面が多々ある。スタッフの情熱で何とかカバーしてきた感がある。経常費は学納金で補い、設備の拡充は寄付金に頼らざるを得ない。PTAでは「黄柳野高校後援会」拡大を中心に取り組んでいる。年間若干の寄付と通信費を頂いて設備拡充に充てるとともに、年四回発行の学校広報「つげの春秋」等を発送し黄柳野高校を多くの方

に知ってもらっている。

PTAの中には暇さえあれば学校に行って花を植えたり、掃除をしたり、色々な手伝いしている人がいる。たぶん他の学校では見られない光景だと思う。「おらが学校」を支える陰の力である。

学校、PTAをサポートする「萌黄会」もえぎかい

黄柳野PTAを語るのもう一つ紹介したい団体に「萌黄会」がある。PTAの任意のOB会である。あらゆる面で学校、PTAをサポートし、又独自の活動も行っている。先日も長野、梅池の会員が経営するペンションで総会を行った。黄柳野高校名誉校長の若林繁太氏を招き座談会的



講演会、懇親会を行った。懇親会席上、若林さんが「家ではね、家内がうるさくてあまり飲めないんですよ」とビールを空けられる姿に、日本を代表する教育者も私も家へ帰れば同じだなと妙な所で親近感を覚えた。次の日は梅池高原を散策し楽しい会であった。PTAを支えつつ自分たちも楽しもうという会である。

五十年後の教育を目指す黄柳野丸

理事長の羽仁協氏がよく「私たちは五十年後の教育をしています」と言われる。全国十万人の不登校児、各県一校分程の高校中途退学者が出ている。黄柳野は不登校、中退の専門校ではありません。普通の高校です。でも一つの選択肢として黄柳野を選んだ子達の殆どが卒業していきます。理事長の言葉は、五十年後には不登校も中退も出な

い教育がなされていると言うことでしよう。学校の言葉を借りれば「癒されて、自由に学べて、学力が身につき、進路が保障される」学校を目指す黄柳野丸に乗った私たちPTAにも課せられた仕事なのでしよう。

おわりに

PTAは変な団体である。他の団体は何らかの目的のため自分の意志で入るのだが、PTAは子どもが同じ学校に入学しただけの事である。だから緩やかな縛りで緩やかなつながりがコツだろう。「つながり・つながる」のテーマです。これを機会につながりを持つ方があったらと思いい電話番号を記します（〇五九四一七八一〇四七二）。

（黄柳野高校PTA前会長・萌黄会現会長）

あたりまえ

河村 治夫

最近、子どもの心身のゆがみについてマスコミでもよくとりあげられるようになった。「学級崩壊」なるものの状況をテレビで見ていると驚いた。それは小学校一年生の姿だった。今までは「学級崩壊」の学級授業の姿が存在しなくなった。いったいなぜということになるのだが、風が吹けば桶屋がもうかる式に、その原因として世の中の不景気が結びついてくるなどその見方はさまざまである。

今から約三十年前、デザイン科（工業デザイン

ン）学生だった私は乳幼児がかかわるモノ、特に保育園、幼稚園内のモノづくりに興味をもった。学校卒業後、三年程弱電メーカーでの企業デザイナーの時期もあったが、やはり乳幼児がかかわる「モノ」へのこだわりから男性保育者（保育士）になり、保育園という空間を自分で直接知ってみるしかなかった。五年半というわずかな期間の後今の工房で主に保育園のモノをつくり続けているが、一言でいえば、乳幼児にとって「あたりまえの保育とは」「あたりまえのモノとは」を現場と

かわりながら探り続けてきたつもりである。こうして「保育」にかかわるはしくれとして、最近の子どもの変化がやはり気にかかる。

私は今のところまだ持ちあわせていないが、そうもいかなくなるだろうと覚悟しているものがある。今やもうあたりまえになりつつある携帯電話である。今や文明の利器は数あれどこれは日常生活用品としてSF的な、夢のような感じがする一品で、夢の超特急といわれた新幹線は単にスピードの面で相対的な驚きだったし、テレビにしてもその仕組みはともかくとして電気紙芝居という意味での驚きだった。しかし、月に人が立つことや、火を使わずして調理ができること、そして、いつでもどこでもどんなに離れていてもだれとでも連絡がとりあえることとなると、今までのあたりまえが反転してしまうという違った質の驚きとなる。

携帯電話が存在しなかった過去の日常生活の中でどれだけのドラマが生まれたことだろうか、それら多くは悲しみに通じること故に携帯電話に至ったのだろうが、あの有名なドラマ「君の名は」にみられるような男女のすれちがいはいもう小説の材料としては使えない。

乳幼児はほんの五、六年の間にさまざまあたりまえのことを学習していく時期だともいえる。少し前までは、離れたところからテレビのスイッチは入れられない。包丁がなければ料理ができない。手紙はそれ自身が移動して届くもの。水道の蛇口は手でひねる。等々どれもごくあたりまえのことだった。それが今やあたりまえではなくなった。これらあたりまえのことは、いうなれば人として生きていく上での基本である。この基本が乳幼児期にしっかりと学習されることになる。こんなことは少し前まで大人が特別意識しておく必要はな

かったが、今やそうではない時代になったということである。

ある程度「基本」を学習済みの現代の大人は文明の利器をそれとして生活の中にとり入れてもいいかもしれないが、今後の子どもは基本が身につつかぬままということになり、その先がぐらつくのではと心配になるのはこれまたあたりまえである。もはや家庭内環境だけで乳幼児に「基本」を学習させるのはむずかしい。大人は意識的にその場を用意しなければいけなくなってきた。その役をしっかりと担うのが乳幼児専用生活空間たる保育園、幼稚園ということになる。

最近「ビオトープ教育入門」(山田辰美編著、農文協)という本に出会った。「ビオトープ」とは生物相によって特徴づけられる野生生物の生息環境というほどの意味、と記されている。この本の最初に「学校ビオトープの発展を願って」と題

して杉山恵一さんが一文を載せられている。読んでいてあまりにも説得力があると感じたのでここにその一部を引用させていただきたい。

「個体発生は系統発生を繰り返す、という生物学上の定説があるが、心身の発達においてもそれに似たことが言えるのではないだろうか。つまり、子ども時代のある時期までに、われわれは原始・未開の時代をシンボリックに経験するのである。その後の文明の時代に適応するための学校教育があると考えてよい。小学校の低学年は、その引き継ぎの時期に当たると考えられる。

この原始・未開の段階での経験は、自然の裡で任意に行なわれ、さまざま能力が自得されるべきものである。哺乳類や鳥類の幼い時期の生活ぶりを眺めると、無邪気な遊びのなかで将来の能力が育てられていることを知ることができる。人類といえども、永い生物の歴史の末端に出現したも

のであるから、現在でも同様な条件を備えているものと考えられる。」

この本の中では学校だけではなく、保育園、幼稚園ビオトープの実践も紹介されている。

引用文の中の「子ども時代のある時期までにわれわれは原始・未開の時代をシンボリックに経験する……」の表現は、まさに「モノ」に対してもあてはまることだと私は思っている。動物の中で唯一道具を使う人間として、乳幼児期にはシンボリックなモノ、あたりまえのモノにしっかりかわっておく必要があるということになってくる。

あたりまえのモノとは何なのか、いろいろなとらえ方があるが、モノと接する時「カゲン」が必要であるモノという言い方ができる。例えば鼻水が出て鼻をかもうとする時、チリ紙の束からチリ紙を必要量のみとると、今やあたりまえになったティッシュペーパーボックスからとるのを比べてみればわかる。後者は何のカゲンも必要な

い。こうして見ていけばきりが無い。直接手にする道具ではないが、時を示す時計について考えた場合、本来「時」というアナログなことを表現するあたりまえのモノは、数字のみの変化であるところのデジタル時計よりも、長短二本の針が動くアナログ時計があたりまえとなり、シンボリックなものならば砂時計となる。仕事上いろいろな保育室を見る機会が多いが、さすがに大きなデジタル時計ではなく、「コチコチコチン……」の歌にもあてはまるアナログ時計が壁に掛けられていたり、よりシンボリックな鳩時計をみかけることも多い。

シンボリックといえば、モノの形さえも今やそれぞれの特徴がむやみになくなりつつある。少し前まで、郵便ポスト、まな板、牛乳ビン等々それなりの形があつたが、どれもこれも直方体へと落ちつきたがつているようである。

乳幼児と昨今の「モノ」との関係が、子どもの

心身のゆがみに通じていると言いきる確信はないが、保育園、幼稚園はなんといつても乳幼児にとつての生活の場であることにはまちがいない。そこでの日常生活用品のあり方は保育そのものとのつながりから今まで以上に注意深く考えなければいけないはずである。そんな中で、最近『保育

園のええもん』という本に考え方をまとめてみたが、つくり手側からのみではどうにもならず、「ええもん」（いい物）は今後も保育の中でそれらを使いこなす現場とのプロジェクトチームの中でつくりつづけていくしかないと思っている。

（かて工房）

開発途上国での想いを帰国後も

協力隊幼児教育ネットワークの活動

前田美知子

青年海外協力隊の幼児教育隊員派遣

アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州・

東欧の開発途上国の中に、幼児教育の歩みが少しずつ進んでいます。これらの国に青年海外協力隊の幼稚園教諭隊員・保育士隊員の派遣は二十年の

間に三十か国、のべ二百三十名を超えました。

隊員は文化や教育観も異なる国で、人物・お金も「ないないづくし」の中、保育の経験、技術、知恵を絞って活動します。その国の言葉を話し、庶民層あるいは貧困層の子どもたち、先生たち・保母たちと共に暮しながら、少しでも生活を、保育をよくしようと実践します。どんな環境であっても「自発的参加」と「工夫の精神」に裏打ちされた責任感・積極性・忍耐力そして応用力をもって立ち向い途上国の人々と協調した、二年間の任期を充実感をもって締めくくります。

帰国のときから

日本の幼児教育とは質の異なる厳しさ、楽しさを体験し、活動を終えた隊員は帰国の途についてたとき、第二の故郷ともなった任国への想いと同時に、日本に戻ってからの自分の生き方への模索を

始めます。また、開発途上国に対して自分のできる支援活動はないだろうかと考えを回らせます。

同じ想いをもつ帰国隊員たちが、平成四年「幼児教育ネットワーク」を発足させました。

会の目的は、①帰国隊員の情報交換、②現在途上国で活動している隊員への支援、③協力隊の幼児教育分野の募集への協力。

機関誌として通信を発行し、年一回は「幼児教育ネットワークの集い」を持つこと。

しかし、帰国後しばらくは、日本の社会の中で生きていくことで精一杯。細々と通信を発行するのがやっとという状態。協力隊の技術指導を続け、全隊員とつながりをもってきた私（前田）が相談役として応援することになりました。

古い絵本・おもちゃを現地の隊員に送るための作業など、できることをこつこつとやりながら会としての活動を考えていきました。

このような中で、OME P（世界幼児教育機構）に参加し、協力隊活動を発表したところ、「保育者の実践による国際協力活動」として多くの方が関心を示されました。当時は国際協力が叫ばれ始めた時でしたが、普通の保育者が外国で実践をするということは、ごく少なかったのです。私たちは開発途上国の幼児教育への理解と支援を訴える役割を自覚し、努力しようと話し合いました。

ネットワーク通信の発行

帰国隊員は日本全国、海外にも在住しています。通信の発行は、貴重な情報交換の場、現地の隊員への激励の場、現地の幼児教育情報を盛り込む場として会の大切な柱です。

帰国後の職場復帰、通信教育・大学入学、主婦として子育て奮戦、国際協力関係の仕事、NGO

への参加やあるいは国際結婚、それぞれの立場から現在の想いを伝え、交換するなど誌面は充実してきました。編集・印刷・発送は遠距離の会員でも、交代・分担で行えるところまで成長してきています。

国際協力フェスティバルへの参加

多数の国際協力関係の団体が、国際協力の日に日比谷公園に集合する大イベントに毎年出展します。パネルで途上国の保育現場の実践紹介、協力隊応募を考えている人への相談、途上国のおもちゃ民芸品の即売など。

しかし「幼児教育ネットワーク」ならではのものは「遊びのコーナー」。遊びの名人でもある隊員たちがフィリピンのバンブーダンス・スリランカのココナツポックリ・マレイシアのチョンカー・各国の食器によるままごと遊びなどを展開

すると、アジア・アフリカ・日本の子どもも大人も集まって遊びに熱中。

ここはまた、子どもを連れられた帰国隊員が安心して子どもを遊ばせながら話のできる場として貴重です。国際協力フェスティバルの中で子どものために用意された楽しい場所です。

帰国隊員と派遣中の隊員の連携

現地の隊員は、開発途上国の幼児教育がかかえているさまざまな問題にぶつかり、試行錯誤しながら活動しています。そこで幼児教育ネットワークの組織を通してアンケートを送り、回答をまとめました。これをもとに、開発途上国の実態と協力隊活動の在り方を考察し、成果を次のように生かしています。

①「隊員活動の在り方」をまとめて、現地で活動中の隊員に送り支援とする。



▲国際協力フェスティバルの「遊びコーナー」
子どもを連れられた帰国隊員の楽しい語らい

②日本保育学会においてシンポジウムを行った
り、研究発表を行い自らも学ぶ機会とし研究者・
保育者・学生にも情報提供する。

勉強会

派遣国も世界中にひろがっているので、次々と
帰国する隊員の話聞く会を隔月にもつことがで
きます。中国・モンゴル・ブルガリア・モルデー
ヴ……発表者にとっては、自分の活動のまとめの
機会となり、聞く側にとっては新に情報を吸収
し、協力隊時代に培ったものを思い起して活力の
源とします。

開発途上国からの研修員を迎える

隊員の現地での活動が効果的に展開し、日本の
幼児教育の良さが相手の国に理解された場合、カ
ウンターパート研修が実現することがあります。

途上国での協力者が、日本の教員養成校や保育の
現場で研修するために、十か月ほど来日するの
で、

カウンターパートと前後して帰国した隊員や、
ネットワーク会員が支援の輪をひろげます。この
ような研修生を暖かく迎え協力することによっ
て、幼児教育の交流がより深くなっていくものと
思います。

(協力隊幼児教育ネットワーク相談役)

編集者「つなぐ」雑記

伊集院郁夫

♪きょうも たのしく すみました
なかよしこよしで かえりましょう
せんせい さよなら またまたあした
せんせい さようなら
みなさん さようなら♪

通っていた保育園でうたった「帰りの会」の歌

で、ずっとずっとこの歌詞のとおりに歌っていた。ある時、おやつ？と思う箇所におつかった。それを確認しようと娘に聞いてみたが、そんな歌は「しらなーい」と言う。それも素っ気なく。息子にも聞いてみた。すると今度は「へんなうたー」ときた。「しらなーい」に「へんなうたー」、こうなると、妻に聞けば「……」となり

そんな気になったので、聞くのをやめることにしました。

さてその箇所だが、出だしの「きょうも たのしく すみました」の部分である。「きょうもたのしく」まではいい、その次の「すみました」のところでおやつとなったのである。

これは帰りの会で歌う歌だ。「すみました」のところが抑揚をつけ力強く歌われたとしたら「ああ、今日もおわった、おわった、ヤレヤレ」という感情がこもっている？と思えても不思議ではないかなと感じたのである。歌は担任と園児が向かい合って歌っていたが、互いにヤレヤレと思っていた、そう思うと、複雑な気分になる。もしかすると、その日疲れていた担任が「本音」で歌いそのまま、ということはないと思うが……。

そこでその部分は「すきました」と時間の経過を表す歌詞ではなかったかと思ひ、確かめたかった

のだが、わかったのは「しらなーい」「へんなうたー」だけだったわけである。今でも正確なところはわからない。機会があれば確かめたいと思っているが、家族以外に真顔でこの歌を歌い質問する勇氣はこの歳になってはない。聞かされるほうもつらいのではないか。

今回、「編集に携わる者」の立場から「つなぐ」をテーマに何を書いてもいいという機会をいただいた。「編集者は語らず、ただ書かせるのみ」と思ってきた者がテーマにそって書くというのはテレくさい。まして「編集者」を名乗るにまだ役不足と感じるのでなおさらである。ただ、あらためて「つなぐ」と考えた時、何をどうつなぐのか考えてみる良いきっかけになった。「み」「ぎ」のたった一字へのこだわりも、もしかすると編集という仕事の影響しているのかもしれない。

*

さて、出版物が世に出るには、まず書き手がいて、出版社（企業家）がそれらの労作を出版することを決意し、契約し、制作することによってできるしくみが一般的となっている。その両者の關係をスムーズに進行するよう潤滑剤の役目をするのが「編集者」と考えられていて、書き手を追いつ、原稿を集め、割り付け、校正に没頭するといふきわめて忙しい働きのなる。

「編集」の仕事に、あこがれる方も多いようだが、幼稚園の先生の仕事が「今日は、雑草とり」に、どぶのお掃除」だったりすることも案外多いと聞くと「へえー」と驚かれるのと同じで、随分と地道なものである。

例えば校正。ところによっては「校正者」と「編集者」をわけるくらいの位置をしめる仕事で、一語一語、原稿と付合わせ、原稿どおり間違はなくゲラ刷り上の文章の再現を果す技である。

初校の赤字入れ、著者校引き合わせ、再校、三校、素読みの文脈内容にわたる検

討を経て、文章に誤りのない、誤字誤植のない責了ゲラを印刷所に渡して作業を終えるという地道な作業である。しかも完全な校正はないと言われ、るほどにやってもやっても気になる果てしない作業でもある。

編集に携わりははじめのころ、「校正は書き手と読者をつなぐひとつのカギ」と、その重さを折りにふれ先輩から説かれたが、それは皆苦い経験からきた訓えでもあった。

電算写植を紹介する冊子の中の随筆で「校正の神様」という題の書き手の書きぐせを熟知した練



達の校正者の話を讀んだことがあったが、「文章の生命は、漢字・かなの使い方ひとつにかかっている。それを校正者がさかしらに直してはいけない」という戒めの内容であった。自分も「校正とは字と字を引き合わせるもの讀んではだめだ」と教えられ、原稿とゲラ刷りを何度も見比べているが、安心したことは一度もない。

確かに、一字の脱落、誤植が文意をそこない、書き手の意図を讀者にあやまりつたえてしまうこととがあり、とても「赤鉛筆一本で優雅な内職」とはいかないのである。

初めのころの体験だが、担当の保育雑誌で実践報告を扱った記事があり、その中のある物語を引用した箇所です、

「……ジャックは木の根元にすわって、足を投げ出し、帽子を腹までかぶり……」

と、やってしまったことを思い出す。腹は眼の

誤植だったのである。この時はガックリ、ただただ、ガックリし、「書き手と讀者をつなぐ」難しさと誤りの恐ろしさを知らされた。まさに「コウセイ オソルベシ」である。

ところが、昨今の「ワープロ」の普及はすごいもので、送られてくるほとんどがそうした形式の原稿となった。中にはなかなか使いこなせず苦勞の跡がわかるものもある。そのせいも、書き手もそれを使いこなすことが第一で、神経が表記の細部までいきわたらなくなったのかもしれない。

一例だが「……授業の過程を……」を声をだした讀んでいただきたい。「……ジュギョウノカテイヲ……」。そのままとおつてしまふ。「虚心坦懐」「キョシンタンカイ」。「虚心（わだかまりのない心）をふところにおいだく」とことと、通じるような気もするが、国語辞典では「虚心坦懐——先入観をもたず、ひろく平らかな心。また、そうし

た心で物事に臨む態度」となっている。以前なら「文選」（文字をひろう）「植字」（組版をつくる）といった熟練工が気付き直すこともあった。しかしその印刷過程がなくなり、オペレーターによるコンピュータ化がすすむようになった今日では、前述したように、原稿に忠実な校正の原則にもいくぶん裁量の余地がうまれることになったようだ。

ともあれ、他にもそういう地道な編集実務をとおし「書き手と読者をつなぐ」出版という仕事が続けられているわけである。逆にそういう働きがなければ出版物はできないのである。ただ、編集実務の技だけで書き手と読者をつなぐのかといえはそうではない。

たとえば適切かどうかは分からないが、画学生が、今は画学生としての自分を自覚することで、ひとかどの画家になるべく自分を認識するよう

に、編集者も編集実務家としての自分を自覚することで、やがて「編集者」となりうる自分を設定できるのではないかと思うのである。つまり「編集者とは」という構えが必要になってくるのである。『暮らしの手帳』の花森安治、『世界』の吉野源三郎、『思想の科学』の鶴見俊輔など、それだけあげてもきりが無いほど、強い信念をもち主張し続けてきた「編集者」の先達がいた。冒頭「編集者」として名乗るには不足と書いたのも、それほどに仕事をしているのかという自分自身への問いでもあった。ずいぶんと大げさで生意気な言い方にはなるが、あえていいたい「千万人といえども吾往かん」。まずそう主張することが編集者として「つなぐ」はじめの一步になるのである。街の書店に学術専門書がほとんど並べられることのない今、なおさらにそう感じている。

（新読書社）

「つなぐ」「つながる」

— 高度情報通信時代において —

加々美勝久

中学校に勤務していますが、学校の中で「つなぐ」しごとに関わることが多くあります。何をつないでいるかと言いますと、もっぱらコンピュータや情報機器を、LAN（構内ネットワーク）をはじめインターネットともつながるようネットワークでつないでいます。コンピュータ同士を

つなぐとはどんな作業が必要かと言いますと、まず、コンピュータに固有の番号（IPアドレス）をふります。これは世界でただ一つの番号です。自動的に決まる場合もありますし、一台一台ネットワーク管理者が指定する場合もあります。

名前が決まったら、コンピュータ同士が話し合

い（データをやりとり）をするための手順（プロトコル）を決めます。これで、準備完了です。あとは、有線でも無線でも物理的な線につながれば通信ができるようになります。最近はいンターネットが身近になったことで、ネットワークという言葉が、もっぱらコンピュータネットワークと解されることが多くなってきました。ほんの少し前までは、交通網や人脈などに使われていましたが。

さて、コンピュータをつなぐことは意味があるのでしょうか。実は、つながっただけでは何も起りません。もつとも「つなぐ」には二段階あると考えています。初めに述べたのは、本当にコンピュータ同士を線をつないだ状態です。つぎにこの「線をつながった」状態を利用して、データのやりとりができる段階です。たとえば、電話で考えてみますと、今はほとんどの地域で「線につながって」います。さらに、受話器をとりダイヤル

して相手が電話に出た時点で、「つながった」ことになる段階です。もつとも、そこで「もしもし」とか、「こんにちは」などと言わなければコミュニケーションがはじまりません。コンピュータも同じで、線をつなぐだけでなく、コンピュータ同士を起動しそこに流れるデータがなければつながったことにはなりません。ここでは、第二の段階を中心にふれていきたいと思います。

学校に設置されているコンピュータがつかると、どんなことができるのでしょうか。うち中学校では、各教室にあるコンピュータはいンターネットにもつながっています。もちろんコンピュータ室にあるものや教員が利用しているものもつながっています。また、これらのコンピュータ同士もつながっています。それにより、校内的には、ある部屋にあるプリンタが校内のどこからでも利用できたり、特別のコンピュータを決め

て、そのハードディスクの中にデータを蓄え、たとえばワープロの文書ファイルや出納簿ファイルの共有を行うこともできます。

本校では、子ども達は、日常的にインターネットを利用していますが、使い方は様々です。そもそも、ネットワークにつながったコンピュータを各教室に置いたのは二つの意味があります。一つは、できるだけ早くコンピュータネットワーク環境を経験させるため。すなわち、社会では広く使われ始めていることを学校教育の中にも取り入れ、身近な存在とし、学校が環境的に社会から取り残されないようにと設置しました。もう一つは、実際にネットワークにつながったコンピュータを使うことによつて、コンピュータネットワーク上でできること・できないこと・してはいけないことを生徒が実際に体験する必要があると思つたからです。

さて、このような環境が作られると、コンピュータを通して簡単に教室が社会とつながってしまいます。簡単に世界のどの地域ともつながることができます。たとえば、こんなことがありました。子ども達が、自分で調べている内容に対して、既存の資料では十分に明らかにできない場合に、自分たちで企業や研究室に電子メールで問い合わせ、それに対して先方からきちんと回答の電子メールをいただくことができました。実際に最新の内容を手に入れています。このように直接教室の生徒に外部からの回答がなされる経験は、学校教育の中でまだあまり対応が研究されていません。

「開かれた学校」という言



葉がありますが、この言葉が使われ始めた頃は、このような形でコンピュータネットワークでつながれ「開かれる」ことは視野になかったと思います。しかし、着実に社会とのつながりを持った教室が出現しています。さらに、多くの学校がこのような環境が整備できれば、子ども達同士の交流や授業での相互利用が簡単に可能になります。

また、家庭においても電話線などを利用してインターネットなどの利用ができる環境があれば、簡単に地域が違う子ども達との交流ができます。たとえば、職場の同僚など親が了解している場合には、その子ども同士が年齢が違っていても、電子メールなどで交流することもできます。文字を通してのやりとりが多いので小学校入学前の子どもなどは親の力を借りますが、中学生や高校生と交流しています。地域的に異年齢集団を組みにくい場合には、電話とは違う形のコミュニ

ケーションが成立し新しい方向性を持つかもしれません。

最近、世の中でも、この「つなぐ」とか「つながる」と言う言葉をよく耳にします。これには携帯電話やPHSなどの普及が大きいと思います。移動しながらどこでも利用できることが大きいと思います。ビジネスマンだけでなく、どこでも電子メールを利用できる環境を持っている人間が増えていると思います。わたしも、PDA（携帯情報端末）と、PHSとで歩きながらでも電子メールの発信者と表題などは読み、必要に応じて本文を参照することがあります。いつでもつながっていることをよい方向で利用しない手はないですね。その他のサービスでは、PHSを利用して子どもやお年寄りがどこにいてもわかるシステムなども、家庭とのつながりをいつももつことができるシステムだと思います。

ところで、今までみてきたように、いろいろなものをつないだりそれによってつながったりするものが多くなっています。情報化時代といわれる前は、目に見えないものでつながっていることが多かったと思います。ある意味では、「しぼり」だったのかもしれないし、気持ちの中のつながりだったのかもしれない。絆としてのつながりかもしれません。考えようによっては強いつながりをもてたのかもしれない。それに比べると、今は広く浅くなる可能性もあります。大都市では、親子や地域を越えたつながりができるのに、身近な人たちとはつながらないという現象も起きています。

逆にどこに行ってもつながっているということ、常に会社などにつながっている組織とつながっていると考えると、ぞっとするときもあります。「つなぐ」ことのできるものは「切る」こと

もできると考えておくことも大切かもしれません。

最後に、はじめの話題に戻りますが、電話システムの発明者や一番はじめに電話の環境を整えた人は評価されます。しかし、その後は電話の線を設置するだけでは評価されることはなく、それを使ってどんな仕事をしたかに評価は変わってきます。コンピュータネットワークの評価も今後はその方向になっていくと思います。つながったら教育でなができるかを考えながら実践していきたいと思います。

(お茶の水女子大学附属中学校)

五人の仲間

吉岡 晶子

ここに五人の男児がいる。現在年長組。五人とも三歳入園の三年保育。五人は仲良しで一緒にいることがとても多い。そのことが私の悩みであり、ああでもないこうでもないはずと考え続けられている。

まずメンバ―の紹介。

A夫：四月生まれ。しっかりもの。「行くよ」「いしょう」などかけ声をかける。

B夫：五月生まれ。一人っ子。もめごとや争い事は苦手。自分の判断にちよつと自信がない。

C夫：六月生まれ。言葉が豊富で自分の気持ちをはっきり言葉にする。細かいことが気になる。よく泣く。

D夫：七月生まれ。好奇心、探究心旺盛。運動はややにがて。

E夫：十月生まれ。気が小さいが素直。自信がなくてはじめてのことは手を出さない。

三歳で入園し、いつ頃からか登園するとA夫、B夫、C夫、D夫の四人がまず積み木の所に誰からともなく集まり、ひとしきり四人で遊ぶという日が続くようになった。一区切りすると四人一緒に園庭に出て遊び、降園時に集まる時も四人並んでいるという毎日だった。この頃はまだ一緒にいることはそれほど気にならず、居場所があるんだな”と思ったりしていた。

そのうちにE夫がこのメンバーに加わり、五人は特にけんかをするでもなく困った時には「先生」と来るが、自分達でよく遊んでいた。五人もいるのによく遊んでいるなと思ったりしていた。泣き声が聞こえるとたいていはC夫。「みんながぼくをおいてった」「ぼくを待っててくれない」など大声で泣く。四人はそんなつもりはなくC夫

がちよつと出遅れただけなのだが本人にしてみればそういう気持ちだったのだろう。そんなC夫のけものにもせず五人でぞろぞろ動いていることが多かった。しかし私は五人で遊んでいることは知っていたが、その中で一人ひとりがかどのよう存在かはよく解っていなかった。

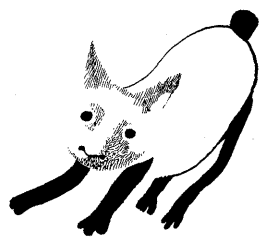
そのような五人のことがだんだん気になってきた。五人だけの世界でいてよいのだろうか。クラスの中の男児十人のうちの半分の五人がかたまっていることの他のメンバーに与える影響もあるだろう。

二期の後半のある日、D夫が段ボールをおしりの下にして斜面をすべっていた。めずらしくD夫と私と五人以外のメンバーでキヤーキヤー言いながらすべり、D夫はうまくいくようにすわり方や足のけり方をいろいろ試していた。しばらくすると「Bちゃんたちは？」とあたりを見回し、近

くにはないとわかると段ボールを持って保育室に走って行った。私も後を追いかけた。四人が歩いているのを見つけると「Bちゃんん！」と言いながら追いかけて、途中で立ち止まって手にした段ボールを一瞬見つめた。そして段ボールをしつかり持ってひきずりながら「待ってー」と走っていったのである。D夫はもつとすべりたいけどみんなと一緒にいたいのだろう。自分がやりたいことよりも仲間への気持ちのほうが強いのかも知れないが、その光景を見てそれでよいのだろうかと考えてしまった。

その後も五人のことが気になり、遊び方や一人ひとりがどうなのか少しでも知りたいと思い、仲間に加わって一緒に遊んでみた。A夫が中心になっっているがボール一個を持っただけでも結構楽しそうに遊んでいる。A夫が強引なわけでもなくいやいや付いて行ってる様子もない。でもA夫の

気が変わると全員がスツと遊びをやめているのを見ると、これでよいのだろうか一人ひとり



りは本当にやりた
いことをやれているのだろうか、人の動きばかり気になっている毎日
でよいのだろうかという
気持ちが日に日につ
っていった。

ときには一人ずつに「今何をしたいの？」と聞いてみたこともあった。自分のやりたいことを意識してほしいし集中してほしいと思っていたのである。聞くと「○○ちゃんと遊びたいの」の返事。私もストレートに「○○ちゃんとじゃなくてしたいことは何？」と聞き返したりした。「ブロック」など答えがかえってくると「それはいいわね」と言ったりして何とかその遊びが面白くな

るようにしてみたが、ひとしきりすると再び集まっていた。私のアタックにもめげず毎日毎日五人で過ごしていた。せめてお弁当の時やお帰りの時ぐらいほかの人との出会いがあってもよいのではと思いい、ゲームをしたりしてすわる場所を変えるようにもしてみた。今思えば、五人で寄り合い合っていて、みんなと一緒にいることが安定の場になっていたのだろう。それを、少しは離れても思ってたかかわっていたのだから、よけいに寄り合い合ったのだろう。五人でいても一人ひとりがじっくり集中して取り組めるような場を考えての働きかけが必要だったのだろうと思う。

大好きな仲間がいて一緒に遊ぶのは悪いことではない、でも……と思いつつ年中組に進級して、メンバーが増えたらまた変わるかもしれないと期待することにした。

二年目の春をむかえた。予想に反して、クラスの人数が二十人から三十四人に増えたことで、よけいに五人はかたまり団結が強くなってしまった。担任が忙しくしているせいか自分達で遊びをすすめられる五人は、さっさと園庭に出かけ砂場や虫さがしなどでどんどん遊び、困った時や見て欲しい時に「先生！」と来るぐらいだった。グループで遊ぶのは良い、でも一人でも遊ぶ、そして自分の興味は追求して行って欲しいという思いはずっと持ったままだった。

ある日、D夫が転んで怪我をした時に、少し室内でやすむことになった。一人でいることになったので、チャンス到来とばかりに「Dちゃん、これやってみる？」と新しいブロックを出してみた。このブロックは部品が細かくて組み合わせ方も結構複雑である。もともと構成したりしくみを考えたりするのがすきで、興味のあることには集

中するD夫、もくもくとやり続けてかなり時間がたった。やっぱりD夫にはこういう時があつてもよいのではと思つていたが、その後ブロックのコーナーには五人が集まつていた。「ああ、やっぱり」と思つたが、D夫を気にしてやつてきた友達ももくもくとブロックをやり、D夫もうれしかったのではないかとその光景に微笑ましさを感じたりもした。

この頃A夫には変化が見られる様になつた。五人で砂場で穴を掘つたりトンネルをつくつたりしていた。水をくむC夫、トンネルを掘るD夫などみんな夢中になっている。すると突然A夫が「やめた、お山に行こう」と一言。C夫とD夫は一瞬とまどうが、やめてA夫についていこうとする。本当なら続けていたであろうのにと思つたが、その時はA夫と一緒に行動したい気持ちのほうが強かつたのだろう。このような場面がしばしば見ら

れるようになった。私が加わつていて「もっと続けたい」とかメンバーに「続きをしよう」と声をかけたりしてみたが駄目だった。

グループの中のA夫としてでなくA夫個人と付き合つて見たいと思ひ、少々不自然ではあるが「A夫くん、手伝つて欲しいことがあるんだけど」と声をかけてみたことがあつた。他の四人には、「A夫くんだけで大丈夫」ということにして、A夫と私の二人でおしゃべりしながらいろいろなことをしていた。その途中で、年長児が製作をしているところを通り掛かり足を止めた。空き箱で犬を作っているのをじつと見ているので「作つてみる？」と声をかけるとA夫は「うん」。さつそく材料を一緒にさがして年長児に聞きながら年長組の部屋で作ることにした。A夫もいやがらなかつた。ここでも私にはA夫を他の四人から離して置きたいという気持がはたらいていた。A夫は

ジーツと見ながら作り、「先生、ここの所こうしたいんだけど」など難しい所になると頼みに来た。かなりの時間をかけて完成させ、できた犬をつれて部屋にもどってきた。この時のA夫の様子を見て、A夫は一人になつたらなつたで自分の力を十分に發揮できる集中力がある、この力がいかされるようになるかと思つたのである。この力があればいつも五人でもいいかと思つたりもした。でも、本当なら砂場の時の様なA夫の言動をもっと考えてみる必要があつたと思う。この頃のA夫は自分の存在に少し不安というか自信がなくなつてきたのではないだろうか。自分の言葉でみんながついて来るといふことで自分の位置を確認したい気持があつたのだろう。

B夫は「先生！」「先生！」と呼ぶことが増えてきた。「先生、外にいったいいいですか」「先生、お弁当ですか」などちよつとしたことを聞きに来

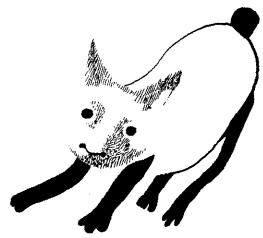
る。今までこんなことはあまりなかつたのにと
思ったが、もしかしたらそれまでは仲間と一緒に
行動するのでよかつたのが今度は自分で判断しよ
うとしているのかもしれないと思ひ、B夫が自分
の判断することに自信が持てるように心掛けた。

そうこうするうちに、気が小さくて口ではいろ
いろ言うが実行が伴いにくいタイプのE夫に変化
が見られる様になつた。フィルムケースのふたで
作るタイヤマシんで遊ぶようになってから、F夫
やG夫と過ごすことが多くなつた。五人の中では
E夫が最初にタイヤマシンを作り、箱積み木を組
み立ててコースを作つて転がすことを繰り返して
楽しんでた。うまくコースを最後まで転がせる様
に積み木を積み直したりスタートの位置を変えて
みたりいろいろ試しており、他の四人もタイヤマ
シンを作つたがE夫が一番この遊びが持続してい
た。

D夫は仲間の名前の呼び方が変わってきた。Aちゃん、Bちゃん、Cちゃん、Eちゃん、と呼んでいたのが、A！、B！、C！、E！と呼び捨てになったのである。五人のなかではみんなのあとからついていきがちのD夫が仲間との対等な感覚を持つ様になったのではないかと思った。D夫は好奇心旺盛で、どうして“どうやるの”“やってみたい”など興味があるし、よく考えて追究する力があるのに、友達のこと気がなまって集中できないことがあり、その良さが生かされてなく仲間認められていないと感じていたのでこの変化はD夫がもつと認められるのではうれしかった。

五歳年長組。朝登園すると「Aちゃんは？」
「Bちゃんは？」とさがしてまず五人で一遊び。
うれしそうに集まっている。春、虫がでてくる時、B夫、E夫は虫探しが大好きだが、A夫はそ

うでもない。「虫探しに行こう」と掛け声はかけるがじっくり探すのは苦手。B夫とE夫は見つかるまでが



んばる。C夫はいろいろ言うが虫をさわるのは苦手。興味の持ち方の違いで、五人で始めた虫探しも二人と三人にわかれたり二人と二人と一人にわかれたり、別のメンバーと遊ぶことになったりしていた。遊びによってわかれることが増えてきた。

ここへきてA夫がちよつと孤独になった。しかし一人でいるのではない。女兒数名の中にいて「Aちゃん、Aちゃん」と呼ばれたり、追いかけられたりして遊んでいる。自分の号令でみんなが着いてくるのが少なくなつたので、自分を見て

くれて大事にしてくれる居場所を見つけているのかもしれない。そのところを人を無理に引きつけるのではない動き方やかかわり方ができるような方向で支えていきたい。

いつも人にくつついていてやってもらう、いれてもらうなど受け身の姿勢があるC夫には、逆にC夫を必要としている人がいて頼られる体験があってもよいのではと思う。そのほうがC夫が相手の様子に気付いたり自分自身の自信に繋がるであらうなど、一人ひとりへの思いがある。

長い道程であったが少しずつ一人ひとりの変化や成長が感じられるようになった。今思うと私は五人でいることばかりを気にし過ぎたかもしれない。五人の中の一人ひとりが大事と思いつながら、それぞれがその中でどのような存在であるのか何を支えていったらよいのかよりも、離れても遊んでほしいと言う気持が強かった。だからよけ

いに寄り添い合ってしまったのかもしれない。このメンバーではぶつかり合いが少ない。関係が固定してきているのだろう。そのところをもっとよく見て、それぞれが違った立場を体験でき、より対等な関係に近づくようにかかわって行きたい。そうになると一人ひとりが自立するのではないだろうか。

群れをなしている人達へのかかわり方は本当にむずかしい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編 集 後 記

今月の特集はへつなく・つながるです。見えるもの、見えないものが複雑につながるりあっている今の生活のいろいろな分野から、この共通テーマで書いていただきました。

*

七月のある日、私は観察のためある幼稚園の砂場で過ごしました。

三人の年長の男児が「落とし穴でも作るか」と言ってやって来て、すぐに大きなシャベルを持って穴を掘り始めました。それは見ている私にも遊びの展開の予測のつく始まり方でした。それが、十分もすると「つながったぞ」の声がして三人の掘った穴は既に川のような溝でつながっ

ていました。そこにバケツの水が大胆に入れられ、トンネルが作られ板の橋が架けられ、山ができました。落とし穴作りのはずが、あつと言う間に砂と水の遊びになつていまし

た。そして、しばらくすると、「カタズケピー」「コワスピー」「ケットバスピー」との掛け声とともにその作品のすべてを足で埋めて、三人はいなくなっていました。

一人取り残された私は何もなくなった砂場をぼうっと眺めています。そして、次々と沸いてきたイメージにつき動かされた三人にとって、足で埋めたところまでが一連の砂場の遊びだったのだと気づきました。予想していないこの展開を見ていた私が一緒に楽しめたのは、この遊びには初めにも終わりにも言葉があつたからだと思いました。(A)

幼 児 の 教 育

第九十八巻 第十号

(一九九九年十月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十一年十月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二丁目一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三―五三九五―五六六―三(営業)

〒〇三―五三九五―五六六―四(編集)

振替 〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

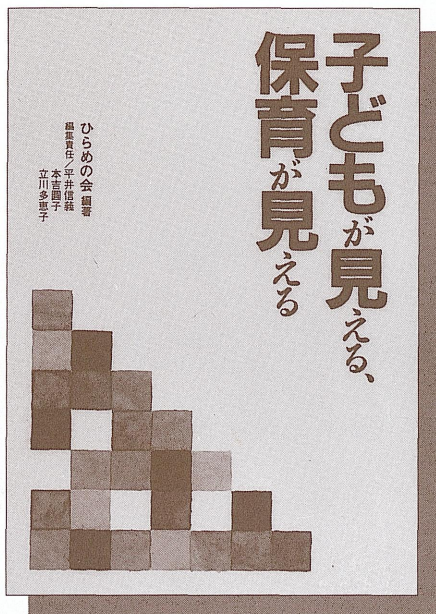
子どもが見える、保育が見える

ひらめの会 編著

編集責任／平井信義・本吉圓子・立川多恵子

好評
発売中

保育に花を咲かせましょう



心踊らせて保育の現場に飛び込んだものの、保育しにくい子どもに困ったなど感じたり、同僚・先輩と保育の意見がかみ合わず人知れず悩んだり、保護者との対応に戸惑うといった経験をされてはいませんか。

本書はそんな悩みをお持ちの保育者に、さまざまな角度から問題解決の糸口を示してくれる格好の保育入門書です。

明日の保育を実りあるものになりたいと努力されている方々にお勧めします。

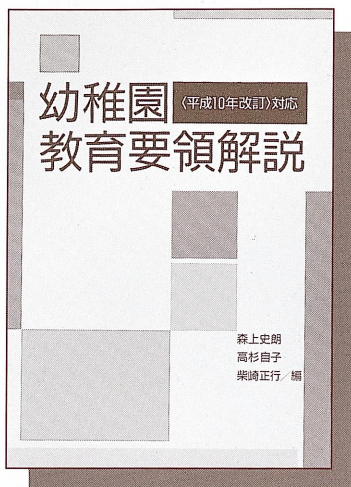
A5判 288頁 定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレール館

平成10年改訂対応

幼稚園教育要領解説

付録 平成10年改訂・幼稚園教育要領全文



好評発売中

平成10年に改訂され、来年度(12年)より実施される新『幼稚園教育要領』をより深く理解するための、教育要領解説書の決定版！

第一線の研究者・保育者が結集し、理論・実践の両面から、新教育要領を総合的に解説します。

【主な内容】

- 第一章 幼稚園教育要領はどのように変わってきたか
—元年から10年までの子どもを取り巻く環境の変化と、改訂までの概略—
- 第二章 幼稚園教育の考え方の基本
—平成元年教育要領の基本を解説—
- 第三章 幼稚園教育の充実と発展(10年改訂のポイント)
—元年教育要領との相違点を詳しく解説し、新教育要領がめざすものを、くっきりと浮かび上がらせます—
- 第四章 幼稚園教育要領の内容
—教育要領の組立て、子どもの生活と遊び、各領域の意味と相互関係について、詳しく解説します—
- 第五章 幼稚園教育を計画し実践するために
—指導計画作成のための考え方の基本を詳説します—
- 第六章 教師の役割
—10年改訂で強調された“教師の役割”のポイントについて詳説します—
- 第七章 幼稚園運営の弾力化
—これからの幼稚園運営の方向を明らかにします—

森上史朗 高杉自子 柴崎正行／編著

A5判・並製・カバー付・288頁・定価：本体1,600円＋税

キンダーブックの
フレール館